

釧路市立博物館 80年の歩み

戸田 恭司*

History of Kushiro City Museum

Kyoji TODA *

はじめに

2016年（平成28年）7月14日、釧路市立博物館では前身の釧路市立郷土博物館が開館してから80周年を迎えた。この節目を記念して7月14日並びに現在の博物館が移転新築して開館した11月3日を中心にさまざまな催し物を企画し、当館の存在をあらためてアピールした。

ここでは、これまでの当館の歩みを振り返り、今後について考えてみたい。なお、創立から1986年（昭和61年）までは主に「釧路市立博物館50年史」（西編1991）の記述によることとし、その後の30年を追加する形で描いていく。

1. 釧路市立郷土博物館の創立

現在の博物館の入口に向かって右側奥に一体の胸像が置かれている。初代館長の片岡新助氏である。氏は現在の山形県米沢市に生まれ、1917年（大正6年）に釧路へ移られた。子供時代から自然に親しみ、各種標本や剥製の製作にいそしんできたという。当初、阿寒国立公園を念頭に、釧路地方の動物の剥製類を主体とする自然科学資料を紹介する私設博物館の構想を持った。これを実現すべく、設立趣意書を作成して開設に向けて運動を展開された。しかしながら、この運動の賛同者の中から公立博物館設置を望む声が高くなっていき、市立博物館設立へと転換が図られた。



写真1. 創立当時の釧路市立郷土博物館

1936年（昭和11年）7月14日、当時は幣舞町にあった市役所本庁舎に隣接する建物（元水道建設事務所）を利用する形で、1階は市立簡易図書館、2階が市立郷土博物館として開館した。鳥獣類の剥製、魚類・昆虫などの標本、考古、アイヌ関係資料など310点余りが展示された。1937年（同12年）に図書館主事（博物館事務員兼務）に任命された片岡氏は1940年（同15年）に博物館主事、1947年（同22年）には館

* 釧路市立博物館 Kushiro City Museum

長として博物館の運営に携わった。

戦時下、空襲による被害を予想して博物館を一時休館とし、アイヌ民族資料など重要な資料については阿寒湖畔の阿寒参考館へ疎開し、戦後まもなく再開した。片岡氏が館長に任命された頃には市役所本庁舎の狭隘化に伴い、図書館並びに博物館の移転・新館建設の声が上がっていた。1949年（昭和24年）2月から翌年3月末まで丸三鶴屋デパートと賃貸契約を結んで同デパート内に移転した。

2. 鶴ヶ岱公園内への移転

この頃には都市計画の中で鶴ヶ岱公園内に新館建設の構想が上がっており、大川町にあった元釧路市警察署の建物を鶴ヶ岱公園内に移転改築して1951年（昭和26年）7月に開館した。



写真2. 鶴ヶ岱公園時代の釧路市立郷土博物館



写真3. 鶴ヶ岱公園時代の博物館の内部

1階には産業資料、美術工芸などの資料、2階は考古、アイヌ、動植物の標本などの資料が展示された。「1階で釧路の基幹産業を考え、釧路の自然と歴史の特色を探り、そこに芽生えた芸術の一端にふれ、2階

の展示室に至るといふ工夫をこらし、・・・与えられた空間を巧に利用したきわめて完成度の高い展示であった」（西1991）。

ただ、この新館建設の予算審議の中で、博物館には片岡氏が個人所有している資料のほかにはほとんど残るものはないことから建設には疑問だという声が上がリ、これを機会に片岡氏は市に4,580点を寄贈されている。

また、付属施設として小動物園と植物園が置かれ、前者は公園内に動物の飼育ゲージが置かれて、市民の中には記憶されている方も多し。これらは1975年（昭和50年）の釧路市動物園の開園に伴って移転された。

開館後、さまざまな館活動が行われている。寄贈を受けた講堂では教育普及活動の展開が可能となり、開館記念事業として正倉院・法隆寺・東京国立博物館より借用した宝物の特別展が開催されたほか、各種講習会・特別展などが行われている。

「釧路博物館新聞」の発行も大きな動きであった。発行の意図を「釧路の百科全書たらしむべき釧路のあらゆる文献的要素を供えた記事掲載にあった」（片岡1968）と片岡氏は述べている。釧路の自然や歴史に関わるさまざまなことがらについて、研究者のみならずさまざまな方々が関わって書き記した貴重な文献となつて、現在の「釧路市立博物館館報」へと続いている。昭和30年代に入り、市内の発掘調査が進められた際には一般市民の参加が見られ、市内各中・高校の郷土史クラブや考古学部の生徒が博物館に出入りする姿が多くなった。この後の発掘調査では考古学以外の専門分野の研究者が参加し、学史に残る成果を得ることとなったが、関係する異なった専門分野の研究者が調査に参加、報告書を作成、その成果を展示などの教育普及に生かしていくという、後の総合調査につながっていく活動がここで芽生えたといつてよい。

各種標本採集会に加えて遺跡探訪会などの館外での教育普及事業が行われる中、講演会や座談会の開催機会も増えていったが、これらの活動を支えていたのは当館に事務局を置く釧路考古学研究会や日本野鳥の会釧路支部などの関係団体であった。その後も各団体が設立され、昭和40年代には釧路自然保護協会や釧路市立博物館友の会が誕生している。

地下水位の高い低湿地という博物館の立地は、建物の老朽化を早めた。1973年（昭和48年）に大改修が行われたが、博物館の機能としては限界に達していた。また、発掘調査に伴って資料が増加していったほか、歴史資料、民族資料、自然関係資料などの資料の増加により、館内での資料整理・保管が困難となり、収蔵スペースの確保が急務となった。結果として、プレハブ収蔵庫の増設、市役所地下倉庫の利用、公益質屋の借り上げなど、場所の確保に当たった。

3. 新館建設に向けて

並行する形で新館建設問題が話題となつていたが、昭和40年代半ばまでは進展はしなかった。その間、7月14日の創立記念日にちなんだ事業や装いも新たになった特別展の開催、地元新聞への寄稿記事掲載、市民からの大量の資料寄贈、そして市民による新館建設運動など、新館建設に向けての動きが見られた。1966

年（昭和41年）の創立30周年記念には、式典・祝賀会と博物館問題についてパネルディスカッションが開催されている。

このうちで、「郷土博物誌」と題した地元新聞への掲載は、釧路の自然・歴史や博物館に関わる情報などをわかりやすく提供する内容となっており、掲載頻度は少なくなつてはいるが、現在に至っている長い取り組みとなっている。

さて、市民からの新館建設運動は、1966年（昭和41年）1月に発足した釧路市立郷土博物館移築促進準備委員会が博物館の移築について市長に対して要望書を提出するという形で進められた。これに対する市側の回答は1971年（同46年）に設計、それ以降に着工ということであったが、市立図書館の建設が先行することとなった。その一方で、自分たちの求めに対応してくれる博物館を市民は望んでいた。幅広い求めに応じていくためにも専門職員の配置が必要であり、1970年（昭和45年）から順次、考古、動物、植物の専門職員が各々採用され、非常勤嘱託として昆虫研究家の飯島一雄氏が迎えられ、体制の充実が図られた。単位制を導入して受講者に修了証・皆勤賞を授与する「博物館大学」が開講し、釧路湿原や春採湖、先史学や生態学といったテーマを取り上げて市民への情報提供の場を作った。これが現在の「学芸員トーク」となつて続いている。

また、博物館資料の充実を目指して資料の寄贈が相次いだ。佐藤直太郎氏はアイヌ資料と考古資料、安倍寛次氏は蔵書と考古資料、そして飯島一雄氏は昆虫資料と、当館では貴重なコレクションとなっている大量の資料が寄贈されたほか、数多くの市民からの寄贈も続いた。

市立図書館の建設の次は動物園、市民文化会館の建設が浮上していく中、博物館新館建設はなかなか具体化していかなかった。また、国庫補助による遺跡の行政発掘が続く一方、北斗遺跡堅穴群の国指定史跡の準備が進められていた。この状況の中、国庫補助が見込める埋蔵文化財調査センター建設が浮上した。博物館協議会の中で、同センターを足がかりとする博物館建設の方向が定まり、この考えが引き継がれて市議会への請願という形となった結果、採択された。同センターは、将来の博物館部分を含めた一体感を持った基本設計を行うことで、博物館全体計画の一部として位

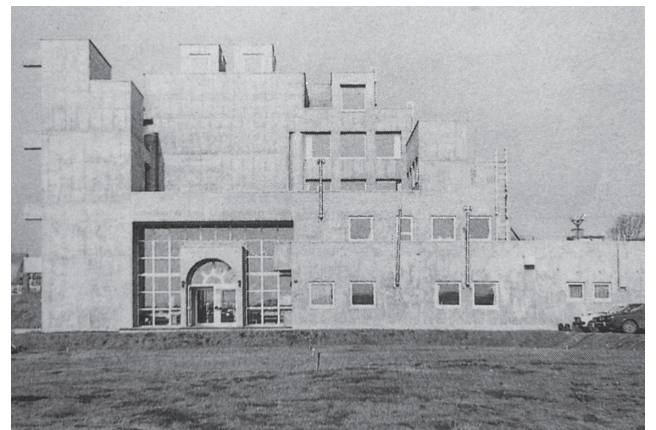


写真4. 釧路市埋蔵文化財調査センター（1977年）

置づけられた。設計は地元出身の建築家・毛綱毅曠氏である。1977年（昭和52年）10月、釧路市埋蔵文化財調査センターが開館、収蔵展示室が公開となった。

新館建設は市総合計画の基本計画十大事業の一つに盛り込まれ、1980年（同55年）着工、1983年（同58年）竣工の展望が開けた。実際には1981年（同56年）3月着工、1983年（同58年）11月に開館と進んだ。工事が進む中、地学・魚類の各専門職員がそれぞれ採用され、また保存処理・写真担当の常勤の嘱託が正職員として採用されて定数増が図られたのである。移転新築に伴い、名称が釧路市立博物館と改められ、11月3日新館がオープンした。

4. 開館した釧路市立博物館

開館初日は5,224名の入館者があり、いかに市民が新館の開館を待ち望んでいたかを知ることができる。常設展示は「北の大地にくり広げられる自然と文化」をテーマとし、自然史を中核とした総合博物館と位置づけられた。春採公園のモニュメントたる建物は、中央に円形のドームを備えた、左右対称の形で、湿原のタンチョウが両翼を広げたイメージを表している。



写真5. 釧路市立博物館開館当日（1983年11月3日）



写真6. 博物館常設展示室1階

3層に分けられた展示空間は「大地の層」の1階、「人間の層」の2階、そして「天の層」の4階からなり、人間と自然のつながりを表す二重らせん階段でそれぞれ結ばれている。

展示の情報は、大型の展示物や模型、ジオラマを配して展示のメインテーマを展開する「テーマ通り」と、展示のサブテーマ、またはより詳しい情報を提供する「セ

クション通り」の2種に配置している。後者は各分野の学芸員が行った調査・研究の成果を展示で紹介しており、まさに学芸員の研究発表の場となっている。

1階のジオラマでは湿原における沼岸の水中断面や、湿原そのもの、湿原の植物の断面が、まさにその場から切り取られたかのように再現されている。2階の壁面では、発掘の現場をそのまま移し取って復元した東釧路貝塚の貝層断面に目を奪われる。また、漁船が動力化される前に使われていた帆船の川崎船は、これらを製作してきた船大工によって復元され、実際に進水式を行って釧路川を帆走させた上で展示したという本物が持つ説得力を生かそうとの意図がある。

4階では、建物の中央に位置するドームの空間で二分する通路を挟んで、湿原に生息するタンチョウの夏と冬のようなすを紹介している。ここは「ダイオ・ネイチュア・ドーム」と名付けられた、360度見渡すことができるジオラマとなっており、来館者自身が展示そのものの中に入り込む、そしてこの中を散策しながら情報を得ていくという手法を用いている。

さらに、シンセサイザーを用いて作られた「サウンドスケープ」と呼ばれる立体環境音楽は、音を媒体とした展示テーマを伝えるものである。「湿原を吹き抜ける風と水の流れ」「コタンを吹き抜ける風や梢からこぼれる光」など、展示室ごとに異なるデザインされた音を体感しながら展示のイメージをふくらませることができる。

なお、開館日の前後にいくつかの記念事業が行われた。まず、社団法人北海道ウタリ協会（現公益社団法人北海道アイヌ協会）釧路支部が中心となって、4階展示室の「ヒグマの霊送り」のコーナー前でカムイノミが行われ、同じく4階の壁面に彫刻家床ヌプリ氏製作のレリーフ「カムイミントラ」の除幕式が本人同席のもと行われた。記念式典と並んで、前庭では釧路市青少年科学館前から移設された本郷新の「朔北の母子像」の除幕式が、また奈良国立文化財研究所所長坪井清足氏の記念特別講演も行われ、にぎやかな雰囲気の中で新たなスタートを切った。

モニュメントと呼ぶにふさわしい建物は日本建築学会賞作品賞を、斬新な展示では通産省のディスプレイ産業大賞を、それぞれ受賞。さらに、北海道博物館大会、日本博物館大会と相次いで開催され、広く新館が知られることとなった。当館の長い間の蓄積が一举に花開いたと言っても過言ではない。

5. 平成時代の博物館

その後も分野ごとに、あるいは全館をあげて調査研究・普及活動などに積極的に取り組んでいった。総合調査では、文化庁の補助事業として「天然記念物春採湖ヒブナ生息地保存対策調査」（1985～1987年）が実施され、ヒブナの起源や生活史の一部が明らかになり、以後の保護対策へとつながった。続いて阿寒川水系総合調査（1989～1992年）が実施され、これまで体系的に調査が行われてこなかった地域に自然や歴史の幅広い分野で取り組んだ。

1987年（昭和62年）7月、釧路湿原が28番目の国立公園に指定され、「釧路湿原総合調査」以後も積み重ねられてきた調査結果が指定に結びついた。続い

て、1990年（平成2年）ラムサール条約締結国釧路会議の開催が決定。3年後の会議開催に備えるため、当館学芸員が環境庁へ出向し、専門家の立場から会議の準備を進める役割を担った。館内では、会議前後そしてそれ以後に来館が期待される外国人客へ向けて、展示室内の解説を英文化したパネルの設置を行った。また、釧路湿原の地形や動植物、人々の営みなどについて当館学芸員が中心となって、わかりやすくまとめた新聞記事が400回にわたって掲載され、市民の関心を高めることとなった。連載終了後、これは一冊の本にまとめられた。

釧路会議まであと5ヶ月ほどに迫って来た1993年（平成5年）1月15日夜、震度6を記録する釧路沖地震が発生し、展示資料や収蔵資料を中心に被害が出た。埋蔵文化財調査センターや常設展示室で展示していた土器の約7割が、また収蔵庫内でも魚類の液浸標本や陶製の生活用具などが転倒によりそれぞれ破損という被害を受けた。土器は緊急修復が行われ、その他の資料もあわせて、それぞれ転倒防止の方策が採られることとなった。

これまででも当館の活動を大きな力で支えてきた釧路市立博物館友の会が、会員の親睦と会のPRを行う趣旨で始められたのが「博物館まつり」である。会場となった当館講堂では古本のバザー、館収蔵の蓄音機を使ったSPレコードの演奏、同じく館収蔵の紙芝居の実演など、博物館におけるお祭りということ意識した内容となった。友の会事務局の館職員は会員のサポートに回り、第1回のまつりには700名を超える来場者があった。



写真7. 第1回博物館まつり（1990年）

この「博物館まつり」はやがて、来場者にさまざまな体験を楽しんでいただくという内容にシフトしていき、会員が趣向を凝らしたコーナーをそれぞれ作って来場者を迎えている。事情により1回中止となったが毎年開催されており、博物館を会場として友の会会員、館職員そして来場者の3者が、ともに交流する機会となって現在まで続いている。地域の方々に、友の会並びに博物館を身近に感じていただく貴重な機会ともなっている。

また、友の会の自主的な活動は野外での調査にも及んだ。植物が好きな方々を中心に、当館が立地している春採湖畔の植物を調べてガイドブックを作成するという取り組みがされた。植物の名前を単に紹介すると

いうのではなく、植物を観察する人の目線に立って、同じ花でもつぼみ・花・実と、形態が異なる状況の中でもその植物を知ることができる図鑑的な内容を目指した。ある一定の頻度で数多くの植物を調査することは想定されていたものの、非常に労力を必要とする活動となった。調査3年、結果のとりまとめに1年を要してガイドブック「春採湖畔花ごよみ200選+α」が完成された。友の会、博物館の活動としてのみならず、市民による生涯学習の成果としても大変貴重な一冊となっている。

市民と協働する事業として、1998年（平成10年）から特別展「私の博物館」が始められた。地域へ開かれた博物館を目指したもので、博物館を市民に開放し、市民の参加を促し、そして共に創造するという趣旨で企画された。ご自身が所有する思い出の品々やコレクションを、提供していただいた方と協働して展示の企画を立て、場合によっては展示作業も共に行う。そして、展示資料に対する提供者の思いを言葉にして紹介し、来館者にもその思いを共有していただくという狙いも込められた。



写真8. 特別展「私の博物館」
（2015年 トミカコレクション展3）

展示されてきたものは、オートバイ、映画チケット、空き缶、日本酒ラベル、手ぬぐい、ミニカー、手作り模型など常設展示ではおおよそお目にかかれないものばかりである。展示の開催にあわせて、入館無料の1階エントランスホールの壁面に改めて展示スペースを作ったが、展示するに当たっては気軽に立ち寄っていただけるよう、楽しい雰囲気を作り出す工夫も凝らした。展示をご覧いただいた方の中から新たな資料提供者も生まれている。

展示室で楽器の演奏を楽しむ「ミュージアムコンサート」も、博物館が展示以外にも楽しんでいただける場所としてアピールした、開かれた博物館の事業の一つと言える。本来演奏する目的の場所ではない所で演奏会が行われるのは今でこそ珍しい風景ではないが、当館では30年ほど前からこの事業を行い、普段とは異なる博物館の魅力をアピールし続けている。

収蔵資料の活用も行ってきた。マリン・トボスくしろ（水産資料展示室）や米町ふるさと館、釧路フィッシャーマンズワーフM00（ムー）の2階展示スペース、春採湖ネイチャーセンターなどへ収蔵資料の貸出、展示を通じて釧路の自然や歴史の魅力を紹介して

きた。また、収蔵資料を市内の施設で展示する「移動博物館」も行っている。当初は収蔵資料と展示ケースを運び入れて展示し、あわせて鋸の目立てや畳表の張り替えといった伝統技術の実演も行われていた。現在はパネル展を中心に市外でも開催するなど、より広範囲に渡っている。

6. 現在そしてこれから

現在も調査研究、それに裏打ちされた普及事業が精力的に行われている。石炭産業に関するテーマもその一つ。会社の経営に関わる資料を保全し、かつ研究者を受け入れて分析を進めながら関係者への聞き取り、新たな資料の掘り起し、それらの結果を企画展、関係者を含めた講演会、現地への見学会、残された記録映像の上映会といった、調査研究から資料収集、普及事業へと、理想的な展開を見せている。もちろん、担当職員が人並み以上の努力を重ねてきた結果ではあるが、地域がこのことを必要としていると博物館全体で共通認識を持ち、そして地域の人々の支えがあってこそ実現してきた。

現在地に移転してから33年を経過し、当時の移転開館の大事業を支えた職員から若い世代への交代が進んでいる。年々右肩下がりがだった来館者数が数年前から右肩上がりに回復を見せており、これまでの活動だけにこだわらない柔軟な発想のもと、さまざまな活動にチャレンジしていることが大きな原動力となっているように思われる。

終わりに、当館の今後についていくつか述べてみたい。2008年（平成20年）にミンクジラの骨格標本を含めたクジラのコーナーを充実して以来の展示リニューアルを、80周年にあわせて2016年（平成28年）に魚類・両生類のコーナーで行ったが、その他の展示についても順次進めて情報の更新などを行い、さらなるレベルアップを目指す。収蔵関係では、新たに受け入れる資料にも対応するため、既存の収蔵資料の再整理、並行して館外での収蔵スペースの確保、また資料の活用という点からデータベース化とその公開を一層進める。これらは年々増加している外国人観光客も含め、博物館を利用する人々に快適に過ごしていただくという要素も入れて施設というハード面の整備を進めることであり、予算規模的にも大きな課題と言える。



写真9. リニューアルされた魚類コーナー (2016年)

また、主に小学校の授業で使用する前提で収蔵資料をコンパクトにまとめたトランクキットを製作し、今年度から貸出を始めた。1時間の授業で展開できるようにプログラミングの例も添えており、学校との新たな連携として広がる可能性を持っている。

さらに、釧路をフィールドとした大学の調査研究の受け入れはゼミ合宿の実施に発展し、さらに大学と釧路市との学術協定締結に至っている。市としても、経済効果や知名度アップなどにつながっており、さらなる継続に期待できる。

一方、市内の文化施設で活動されているボランティアの方々が一堂に会して交流する「文化ボランティアの集い」がこれまで6回開催され、博物館友の会が中心的な役割を果たしており、会員の意識向上に寄与している。ただ、会員の高齢化が進んでおり、新たな会員獲得が課題となっている。それにはボランティア活動のみならず、より多彩な生涯学習活動が博物館というフィールドで実現できる環境作りが求められよう。もちろん、友の会会員に限らず、地域の方々に対しても言えることであり、新たな人々との関わりが多彩な博物館活動の展開にもつながっていくと思われる。

まとまりがなくなってきたが、博物館における調査研究、資料の収集・保管、普及活動と、時代は変わっていてもこれらの活動が重要であることは変わらない。地域における課題解決へ向けて、さまざまな連携を図りながら成果を出していくことで、地域の人々に支えられていくのだと改めて感じる。博物館はモノ・ヒトを含めた情報発信の拠点として、地域に必要な情報を収集して地域に還元するという努力を今後も惜しまず続けていく。それが地域にある博物館の存在意義ではないかと思われる。

引用文献

- 片岡新助. 1965. 私の釧路市立郷土博物館沿革史(一). 釧路市立郷土博物館館報, 156:7-8.
- 片岡新助. 1968. 新助の生涯(一). 私家版.
- 西 幸隆(編). 1991. 釧路市立博物館50年史. 釧路市立博物館, 釧路.
- 澤 四郎. 1985. 釧路市立博物館50年の歩みと新館建設. 國學院大學博物館學紀要, 10:1-33.
- 澤 四郎・新庄久志. 1985. 釧路市立博物館一常設展示におけるいくつかの試み. 博物館研究, 204:18-27.



図1. 博物館創立80周年記念ポスター (2016年6月)

関係年表

1936 (昭和11) 年	7.14	釧路市立郷土博物館、開館式を挙行
1940 (15) 年	4.1	片岡新助氏、釧路市立郷土博物館主事に任命
1944 (19) 年	7.	本土空襲に伴い、一時閉館
1945 (20) 年	5.	アイヌ関係資料等を阿寒湖畔の釧路営林区駐勤所「参考館」へ疎開
1947 (22) 年	8.28	片岡主事、釧路市立郷土博物館長に任命
1949 (24) 年	2.1	博物館が丸三鶴屋デパート3階へ移転
1950 (25) 年	11.28	鶴ヶ岱公園内に講堂が完成。同31日に博物館が丸三鶴屋デパートから講堂へ移転
1951 (26) 年	3.	鶴ヶ岱公園内で新館の工事着工
	7.20	片岡館長、個人資料4,580点を市へ寄贈
	7.28	鶴ヶ岱新館が完成し開館
1952 (27) 年	1.20	「釧路博物館新聞」第1号を発行
1954 (29) 年	4.1	釧路市立郷土博物館協議会委員を委嘱
1957 (32) 年	7.2	第5回全国博物館大会が釧路市で開催
1958 (33) 年	4.1	有料入館となる。大人10円・学生5円
1960 (35) 年	5.20	釧路博物館新聞を「釧路市立郷土博物館館報」と改称 (通算101号)
1965 (40) 年	7.8	第4回北海道博物館大会が釧路市で開催
1966 (41) 年	3.29	第1回博物館展「釧路のあけぼの」開催
	7.14	創立30周年記念事業を開催
1971 (46) 年	4.24	釧路市立郷土博物館友の会発足
	5.	「博物館大学」開講
	7.1	釧路湿原総合調査開始 (1974年まで)
1976 (51) 年	11.1	道東海岸線総合調査開始 (1982年まで)
1977 (52) 年	10.4	釧路市埋蔵文化財調査センター開館
1983 (58) 年	3.31	新館展示準備のため、釧路市立郷土博物館閉館
	11.3	釧路市立博物館開館。前日に開館記念式典挙行
1984 (59) 年	7.6	第23回北海道博物館大会開催
	12.11	展示が通商産業大臣賞84「ディスプレイ大賞」受賞
1985 (60) 年	4.	天然記念物春採湖ヒブナ生息地保存対策調査開始 (1987年まで)
1986 (61) 年	5.3	学芸員展示解説が始まる
	7.13	創立50周年記念式典挙行
	8.17	50周年記念「ミュージアムコンサート」開催
1987 (62) 年	10.6	第35回全国博物館大会開催
	11.	北海道新聞社文化賞のうち社会文化賞を受賞
1989 (平成元) 年	6.16	阿寒川水系総合調査開始 (1992年まで)
1990 (2) 年	4.1	ラムサール釧路会議開催 (1993年6月) に対応して植物担当学芸員が環境庁に出向
	9.30	第1回博物館まつり開催
1991 (3) 年	3.31	「釧路市立博物館50年史」発行
1993 (5) 年	1.15	釧路沖地震発生 (震度6)、展示資料等が被災
	9.22	2階展示室にイタオマチブ展示
1994 (6) 年	9.2	巡回展「移動博物館」、生涯学習センター2階で開催
1998 (10) 年	7.11	第1回特別展「私の博物館」開催
	11.21	学芸員講座が「学芸員トーク」に名称変更
2005 (17) 年	5.3~5	「博物館で遊ぼう」開催
2007 (19) 年	2.3	「博物館氷まつり分館」開館
	7.14	合併1周年記念特別展「阿寒・音別・釧路の魅力再発見」開催
2008 (20) 年	4.29	ミンククジラ全身骨格標本展示披露式挙行。常設展の一部をリニューアル
2011 (23) 年	1.23	第1回炭鉱映画祭開催
2013 (25) 年	3.27	展示音声ガイド貸出開始
2016 (28) 年		創立80周年記念の各種事業を開催
	7.14	ミュージアムコンサートを開催
	11.3	魚類・両生類のコーナーのリニューアルオープン式挙行